

# 大学英語教育における聴解力養成の条件 ——北星学園大学英文学科の場合

船 津 好 平  
早 坂 慶 子

- I. 序
- II. 現在の英語聴解力指導体制
- III. 使用資料と分析手順
- IV. 資料結果及び分析
- V. 結語

## I. 序

英語教育において、Listening, Speaking, Reading, Writing のいわゆる 4 技能のうちで、Listening の養成が他の 3 技能に比べてあまり価値が認められず、とかく軽視されていることは内外の外国語教育専門家によって指摘されているところである。たとえば、Paulston & Bruder (1976 : p. 127) は “Comprehending the spoken form of the target language is one of the most difficult tasks for the language learner, yet it is probably the most neglected skill in second language teaching.” と述べ、Listening の訓練がなおざりにされているのは聴解 (listening comprehension) のプロセスの性質について我々が無知であるためであるとし、Listening 指導の重要性を強調している。また竹蓋 (1984 : pp. 5-12) も Pimsleur (1977), Rivers (1978), その他国内の様々なデータを引用しながら、日本の英語教育においても listening の養成が著しく立ち遅れていることを指摘し、ヒアリング指導向上への道——ヒアリング指導の再建計画の骨子を提案している。

1940年代から1960年代前半までアメリカで著しい発展を遂げた構造主

義言語学の影響によるオーディオリンガルアプローチではよく Production の訓練は Recognition の訓練を兼ねるから、発音・発話訓練を十分すれば自然に Recognition の能力が養われるとけん伝されていた。しかしこの見解は Belasco (1965 : p. 486) が次のように述べて以来、相次いで疑問視されてきている。

“Unfortunately, the audio-lingually trained student, as he goes on to higher levels of foreign language learning, is not always equipped with a solid structural stockpile ... Now if conversation is the aim of the audio-lingual approach, it will have to devote much more attention to listening comprehension than it has up to the present time. ... And just because a student can utter a lot of sentences in a foreign language is no guarantee that he will understand them in the mouth of a native speaker.”

Postovsky (1975 : p. 21) も recognition のレベル、つまり listening の訓練を他の技能に優先して行うことが効果的であると主張している。

“The integrated linguistic system is first internalized on the recognition level; when this is achieved, the complexity of the learning task for production is correspondingly reduced, the need for automaticity of response more pressing and utility of pattern drills indisputable.”

Asher (1974) は Total Physical Response 指導法によってスペイン語を1学期間(45時間)のうち70%を listening, 20%を speaking, 10%を reading と writing に割く時間配分の指導で、1学期間200時間の指導を受けた高校の学級生徒よりも listening の能力で優れた結果が出たと報告している。このことは Production の訓練よりも Recognition の訓練に、より多くの時間をかける方がより実質の伴った語学教育であることを物語っている。日本の英語教育では、とくに中学校では週3時間体制の影響で、listening の訓練のために時間を割く余裕がないし、また高校ではほとんどの大学で、ヒアリングテストを入試にとり入れていないために、あまり listening の訓練に力を入れていないのが実状である。真の意味の英語伝達能力を養うために中学・高校の段階で Language Lab 等の徹底した活用を通して listening 訓練の指導がなされるべきである。そのため

## 大学英語教育における聴解力養成の条件

には大学レベルで listening 重視の英語教育体制が確立され、国公立大学をはじめもっと多くの私立大学でも積極的に入試にヒアリングテストを導入（年々その気運は高まってきてはいるが）されることが強く望まれる。

本学英文学科ではすでに1973年から入試にヒアリングテストを実施し、入学後英会話のクラス編成等に役立っている。

また本学では英語ネイティブ・スピーカーの直接指導による英語発音法及び英会話（通常教室での）の授業のほかに、1968年 Sony CIM-4A 調整卓一式と Sony ER-7DA 型のテープレコーダーを取り付けたブース15台（2年後14台増し29台となる）の小規模な Language Lab の設置により英文学科学生の英語聴解力養成を計って来たが、1978年8月に次の章で述べるような規模に拡張した新しい Language Lab システムによって、さらに学生達の英語聴解力養成の条件の充実を計った。

本稿では過去5カ年実施してきた JACET 英語聴解力標準テストの結果の分析を中心にして、英文学科学生の英語聴解力の伸長度を確認し、さらに聴解困難項目を明らかにすることにより、英語聴解力養成条件改善の方向を探りたい。また、この機会に本学で実施している入試ヒアリングテストの結果（1983年と1984年の2カ年分）と JACET 英語聴解力標準テストの結果との相関を調べ、入試にヒアリングテストを課することの妥当性もあわせて考察してみることにする。

## II. 現在の英語聴解力指導体制

A. 本学に設置されている Language Lab (SONY LL システム機器による) の規模

### [LL 教室]

ブースレコーダー (ER88) 64

アナライザーセクター (RN-830) 64

モニターテレビ 6

### [調整室]

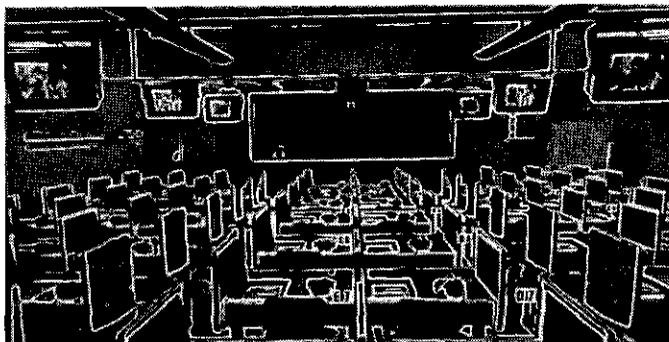
コントロールコンソール (LLC-8) 1

カラー教材提示器・スライド付 (VID-2010A)	1
アナライザー (RN-850)	1
オープンデッキ (TC-707)	4
カセットデッキ (ER-7CM)	4
プログラムエディター (PME-100)	1
プログラムミキサー (PMM-100)	1
ビデオ装置 U-matic (VO-2700 VO-2900)	2
ベータマックス (SL-F11)	1
VHS (ビクター) (HR-D725)	1

上記装置により主として次のような視聴覚授業及びプログラム編集を行うことができる。



(調整室全景)



(L L 教室全景)

## 大学英語教育における聴解力養成の条件

1. 4種類の音声教材の同時送り出し
2. 1種類の映像/音声教材の送り出し
3. 各ブースのモニタリングおよび相互通話
4. アナライザーによる回答・集計, フィードバック
5. カセットプリンターによる高速プリント
6. 各種VTR間の相互ダビング(ベータマックス—VHS—U-matic)
7. 各種VTRのタイマーによる留守録画
8. リモコンによる録音室からの録音

### B. カリキュラム

本学英文学科第1年次及び第2年次学生の英語聴解力養成に直接係わる授業科目とその時間数は次の通りである。

(第1年次)

発音法——90分  $(\frac{CR}{45} + \frac{LL}{45}) \times 30週 = 2,700分$

英会話——225分  $(\frac{CR}{90} + \frac{LL}{90} + \frac{HR}{45}) \times 30週 = 6,750分$

英語 I ——90分  $\times 30週 = 2,700分$

(第2年次)

英会話——225分  $(\frac{CR}{90} + \frac{LL}{90} + \frac{HR}{45}) \times 30週 = 6,750分$

英語 II ——90分  $\times 30週 = 2,700分$

注：C R = Classroom (通常教室) でネイティブスピーカーから直接指導を受ける時間。

L L = Language Lab で受ける訓練時間。

H R = Hearing Room で録音テープを聴取する時間。

英語 I = 日本人指導による英語を使用しての Reading の授業。

英語 II = 英語ネイティブスピーカーによる英語を使用しての Reading の授業。

### III. 使用資料と分析手順

今回の調査に当っては次の二種類のヒアリングテストの結果を取り扱うことにする。

○入試ヒアリングテスト (1983年と1984年の2カ年分)

○ JACET 英語聴解力標準テスト (1981年～1985年の5カ年分)

1. 入試ヒアリング

本学英文学科入学者のうち、推薦及び社会人入学の学生を除く全ての学生がこのテストを受験している。

問題は毎年同様の形式をとり、出題は10問、問題文は本学専任のアメリカ人男女により録音されたものである。PART I の5問は、20～65語から成る英文を聞き、内容と一致するものを選択するものである。PART II は100～150語から成る対話文を聞いたあと質問が読まれ、答に該当するものを4つの中から1つ選択する。解答はマークシート方式による。満点は20点である。(付録参照)

今回対象となる受験者数は次のとおりである。

1983年	70名
1984	89
計	159

尚、前述したように、入学者の中にはこのテストを受けない者もいる関係上、本調査に当って、このテストの細かな分析は行わず、得点平均あるいは、JACET 英語聴解力標準テストとの相関の上から本テストを使用するものとする。

2. JACET 英語聴解力標準テスト

JACET (大学英語教育学会) によって1975年に開発されて以来、春 (Form A)、秋 (Form B) の年2回全国規模で実施されているこのテストに本学では1981年秋より、1・2年次英会話履修学生を対象とし参加している。1981年から1984年までは Form B、1984年入学生より Form A に移行した。Form A、Form B は全く同形式で両者に難易度の差はない。<sup>1)</sup>

テストは3つのPARTより成り、(例題については pp.168—9参照)採点方法は下記の通りである。

PART 1, PART 2 各20問:  $(R-W) \times 2$

PART 3 10問:  $(2R-W) \times 2$  (R: 正答, W: 誤答)

120点満点で減点法をとっているのでマイナス点もあり得る。

本学の学生は1年次と2年次にこのテストを受けることにより、1年

## 大学英語教育における聴解力養成の条件

間の聴解力伸長度を知る一つの目安とする。

本調査の対象となる受験者数は次のとおりである。

1981年1年目 (Form B)	98名
2年目 ( // )	95
1982年1年目 ( // )	105
2年目 ( // )	91
1983年1年目 ( // )	87
2年目 ( // )	106
1984年1年目 (Form A)	107
2年目 (Form B)	76
1985年1年目 (Form A)	113
2年目 ( // )	105
計	983

調査内容は次のとおりである。

- (1)各年度、学年別平均得点、SD、ランク分布。
- (2)各 PART の平均得点、誤答分析。
- (3)1年次から2年次への上昇(下降)率の特徴を総合得点及び各 PART の得点より分析。

### 3. 入試ヒアリングテストと JACET 英語聴解力標準テスト<sup>2)</sup>の相関

- (1)入試ヒアリング対1年次 JACET ヒアリング
- (2)入試ヒアリング対2年次 JACET ヒアリング

## IV. 資料結果及び分析

### 1. 入試ヒアリングテスト

同一形式のテストではあっても得点分布は1983年が、1984年と比較して異った様相を呈して、平均得点が高く、高得点に分布が集中している。

(表1, 図1)

### 2. JACET ヒアリング

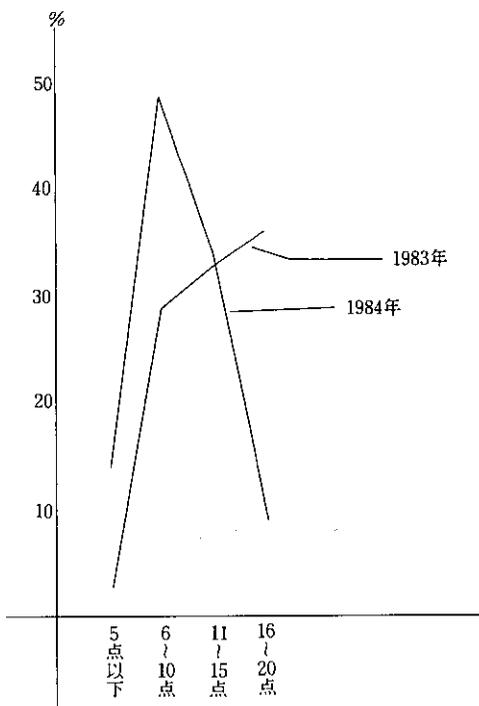
(1)1984年～1985年の年度別得点及びランク分布は表2に示すとおりである。

5回の JACET ヒアリングの内、Form B 受験者には入学後約半年及

表 1 入試ヒアリング成績<sup>3)</sup>

年	受 験 者 数	最 高 点	最 低 点	平 均
1983	70	20	4	13.1
1984	89	20	2	10.2

図 1 入試ヒアリング得点分布



び1年半後、Form A 受験者には入学後約1カ月及び1年1カ月後の英語聴解力をテストしたことになる。テスト実施時期が秋と春による差は1年目の平均点にやはっきりと見られるが、2年目ではそれ程の差はなく、むしろ Form A による受験結果が Form B によるものを上回って

大学英語教育における聴解力養成の条件

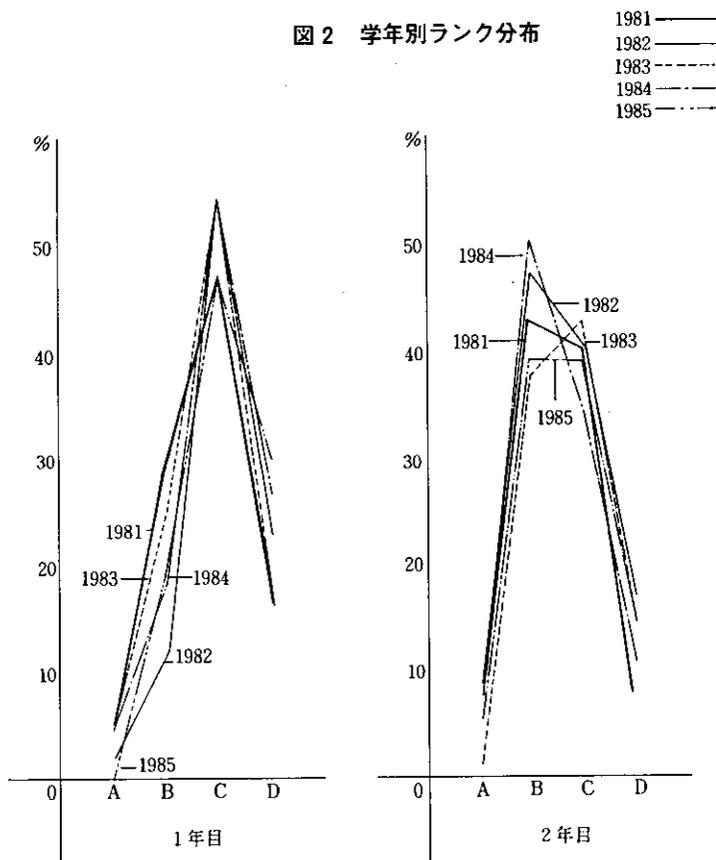
いる場合もある。又 JACET ヒアリングの中で全国私大英文専攻学生の平均点と比較しても、本学 2 年目の得点はかなり高くなっていること<sup>4)</sup>等も併せて考えると、本学での伸長率、つまり 1 年目と 2 年目の JACET ヒアリング実施の間に、相当の聴解力を習得していることが推察されるが、伸長度の詳細は後述することにする。

A～D のランク別分布をグラフで表わすと図 2 のようになる。

表 2 JACET ヒアリング成績

	F o r m	受験者数	最 高 点	最 低 点	平 均 点	S D	ラ ン ク (%) <sup>5)</sup> 入				
							A	B	C	D	
1981	1 年 目	B	98	116	-28	48.4	29.6	(5.1) 5	(29.6) 29	(48.0) 47	(17.3) 17
	2 年 目	B	95	106	-16	53.2	26.5	(1.1) 1	(43.1) 41	(41.1) 39	(14.7) 14
	合 計		193			50.7	28.2	(3.1) 6	(36.3) 70	(44.5) 86	(16.1) 31
1982	1 年 目	B	105	106	-12	39.0	26.6	(1.9) 2	(21.9) 23	(53.3) 56	(22.9) 24
	2 年 目	B	91	116	0	63.0	26.9	(8.7) 8	(47.3) 43	(40.7) 37	( 3.3) 3
	合 計		196			50.1	29.2	(5.1) 10	(33.7) 66	(47.4) 93	(13.8) 27
1983	1 年 目	B	87	112	-20	44.9	28.1	(4.6) 4	(25.3) 22	(54.0) 47	(16.1) 14
	2 年 目	B	106	108	- 2	49.6	26.7	(2.8) 3	(37.7) 40	(42.5) 45	(17.0) 18
	合 計		193			47.5	27.4	(3.6) 7	(32.1) 62	(47.7) 92	(16.6) 32
1984	1 年 目	A	107	120	-26	37.7	29.9	(4.7) 5	(18.7) 20	(46.7) 50	(29.9) 32
	2 年 目	B	76	112	- 6	59.2	27.9	(5.3) 4	(50.0) 38	(34.2) 26	(10.5) 8
	合 計	<sup>6)</sup>	183			46.7	31.0	(4.9) 9	(31.7) 58	(41.5) 76	(21.9) 40
1985	1 年 目	A	113	92	-46	35.7	26.6	( 0) 0	(19.5) 22	(54.0) 61	(26.5) 30
	2 年 目	A	105	112	-18	55.2	29.5	(7.7) 8	(39.0) 41	(39.0) 41	(14.3) 15
	合 計		218			45.1	29.6	(3.7) 8	(28.9) 63	(46.8) 102	(20.6) 45

図 2 学年別ランク分布



1年目と2年目の学生では、その分布状況は明らかに異っている。1年目はCを頂点とする鋭い山型を呈しているが、2年目になるとBランクの上昇が著しく、Cランクを上回るかほぼ同率となっている。1983年のみ、BランクよりCランクが多く、この受験者達は、1年時での平均得点も他と比較して低く(1981年, 1983年)、従って他の年ほどのBランク増加は見られなかった。しかし概ね1年後にBランクとCランクの間で大きな移動があったことがわかる。言い方を変えるならば、2年目の伸長度には、CランクからBランクへの移動の度合いが大きなウェイトを

大学英語教育における聴解力養成の条件

占めていることが予想される。CランクからBランクへの上昇と同時にDランクからCランクへの上昇も次いで多く見られる。Aランクについては、必ずしも1年目より2年目の人数が多いといえない理由として、Aランクの幅がせまく上昇が困難なこと、相当な聴解力がなければ100点以上の得点は望めないこと、そして1年目でAランクに属する学生に移動が少ないこと等が挙げられる。

(2)各 PART 間の得点及び問題点

PART 別得点は表3に記されている。

表3 PART別平均得点

単位：点

		Form	PART 1	PART 2	PART 3	TOTAL
1981	1年目	B	14.6	14.3	19.5	48.4
	2年目	B	17.1	14.6	21.5	53.2
	平均		15.8	14.4	20.5	50.7
1982	1年目	B	11.1	10.4	17.5	39.0
	2年目	B	18.1	19.1	25.8	63.0
	平均		14.3	14.4	21.4	50.1
1983	1年目	B	13.0	13.3	18.6	44.9
	2年目	B	14.3	14.4	20.9	49.6
	平均		13.7	13.9	19.9	47.5
1984	1年目	A	8.2	13.0	16.5	37.7
	2年目	B	16.4	18.0	24.8	59.2
	平均		11.6	15.1	20.0	46.7
1985	1年目	A	7.6	10.9	17.2	35.7
	2年目	A	12.6	18.9	23.7	55.2
	平均		10.0	14.8	20.3	45.1

上の表で注目すべき特徴が見られる。Form B 1年目ではPART 1とPART 2の得点が接近し、PART 3がややそれより高い。Form B 2年目でもほぼ同様のことがいえる。しかしForm AではPART 1, PART 2, PART 3の順で得点が高くなっている。これはFORMの違いによる

特徴ということも考えられるが、テストの実施時期とも併せて考えると、入学時では PART 1 が困難要素を多く含んでいるとの見方もできるであろう。さらにつけ加えるならば、入学時からの聴解力増加を測る目安として、この種の問題への対応を考慮することも必要であるといえよう。

次に誤りの多い問題についての検討を行う。問題の意味は、JACET 聴解力標準テスト作成者の指示により公表できないが、PART 毎の形式を示す例文は次のとおりである。

Part 1 には問題が20あります。その各々の内容が常識で考えて正しい場合は、Part 1 の解答欄の「正」の文字を黒く塗りつぶしてください。正しくない時は「誤」の文字を黒く塗りつぶしてください。各々の問題は1回しか言いません。そのあと7秒ほどポーズがありますからその間に解答してください。では例題をやってみましょう。

Listen to the following examples.

Example 1 The moon moves around the earth. And the earth moves around the sun.

月は地球を回り、地球は太陽を回ると言っていますから、正しいことを述べています。ですから、解答用紙の「正」の文字を黒く塗りつぶします。

Part 2 には20組の文があります。その各々の組は(a), (b)二つの文でできています。(a)の文の言っている内容と(b)の文の言っている内容がほぼ同じかどうかを答えて下さい。もし内容が同じだと思ったら、Part 2 の解答欄の「同」の文字を黒く塗りつぶしてください。違っていると思ったら、「異」の文字を黒く塗りつぶしてください。各々の文は1回しか言いません。そのあと7秒ほどポーズがありますから、その間に解答してください。

では例題をやってみましょう。

Listen to the following examples.

Example 1 (a) Betty plays the piano better than any other student in her class.

大学英語教育における聴解力養成の条件

(b) Betty is the best pianist in her class.

(a)の文は「ベティはクラスのだれよりも上手にピアノを弾く」と言っており、(b)文は「ベティはクラスで一番上手にピアノを弾く人だ」と言っています。この二つの文の言っている内容はほぼ同じです。ですから「同」の文字を黒く塗りつぶします。

Part 3 には問題が10あります。各々の問題の形式は次のようになっています。まず質問が聞こえてきます。たとえば、

Where did Dr. Smith meet his wife for the first time?

この質問に答えるために次の文章を聞いてください。

Dr. Smith is a well-known scientist. He met his wife in Boston for the first time when they were in college. Two years later they got married in New York. They've been married for twenty years.

ここで最初の質問をもう一度繰り返します。

Where did Dr. Smith meet his wife for the first time?

この質問に対する答えを次の A, B, C の三つの中から選んでください。

- A. In New York.
- B. In Boston.
- C. In Chicago.

科学者のスミス氏は学生時代にボストンで初めて奥さんに出会ったと言っていました。ですから正しい答はBです。解答欄のBを黒く塗りつぶすこととなります。

PART 1 (20問), PART 2 (20問), PART 3 (10問) のうち、正答者が50%以下の問題及びその正答率は表4, 表5に示す通りである。

PART 1 と PART 2 の得点は、Form B による受験結果では大差はないにもかかわらず、正答率の低い問題が PART 1 では特定の項目に比較的集中しているのに比べ PART 2 では分散しているのがわかる。

次に正答率が集中して低かった問題について、その要因を探ると大ま

表4 正答率50%以下の問題(1年目)

単位:人(%)

設問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
PART1	1981		35 (35.7)			37 (37.8)			39 (39.8)	45 (45.9)			27 (27.6)	40 (40.8)			36 (36.7)	42 (42.9)		
	1982		40 (38.1)			47 (44.8)							49 (46.7)	51 (48.6)			47 (44.8)	48 (45.7)		
	1983		36 (41.4)			42 (48.3)							38 (43.7)	34 (39.1)			37 (42.5)	39 (44.8)		
	1984				41 (38.3)	44 (41.1)			34 (31.8)	33 (30.8)				46 (43.0)				41 (38.3)		49 (45.8)
	1985		56 (49.6)		42 (37.2)	47 (41.6)			37 (32.7)	42 (37.2)				46 (40.7)				34 (30.0)		56 (49.6)
PART2	1981					34 (34.7)												47 (48.0)		48 (49.0)
	1982					47 (44.8)							49 (46.7)				50 (47.6)			47 (44.8)
	1983					39 (44.8)							42 (48.3)							37 (42.5)
	1984		47 (43.9)	47 (43.9)																
	1985		48 (42.5)	26 (23.0)			52 (46.0)		53 (46.9)	54 (47.8)						55 (48.7)			56 (49.6)	
PART3	1981		42 (42.9)			42 (42.9)														
	1982		27 (25.7)			50 (47.6)														
	1983		30 (34.5)																	
	1984	40 (37.4)	46 (43.0)			37 (34.6)														
	1985	45 (39.8)				36 (31.9)														52 (46.0)

1981:98名 1982:105名 1983:87名 1984:107名 1985:113名

表 5 正答率50%以下の問題(2年目)

単位：人・(%)

設 問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
PART1	1981	45 (47.4)										36 (37.9)				40 (42.1)	39 (41.1)				
	1982							44 (48.4)				34 (37.4)	43 (47.3)								
	1983	37 (34.9)										41 (38.7)	42 (39.6)								
	1984	31 (40.8)				38 (50.0)						29 (38.2)	30 (39.5)			38 (50.0)	37 (48.7)				
	1985								32 (30.5)	46 (43.8)				50 (47.6)				32 (30.5)			51 (48.6)
PART2	1981				45 (47.4)						43 (45.3)				47 (49.5)					45 (47.4)	
	1982				37 (40.7)																
	1983				44 (41.5)							51 (48.1)									52 (49.1)
	1984				36 (47.4)							38 (50.0)			35 (46.1)						
	1985			40 (38.1)																	
PART3	1981	24 (25.3)																			
	1982	38 (41.8)																			
	1983	35 (33.0)																			
	1984	35 (46.1)																			
	1985				49 (46.7)																

1981：95名 1982：91名 1983：106名 1984：76名 1985：105名

大学英語教育における聴解力養成の条件

表 6 誤 答 の 要 因

PART	Q NO	Auditory Discrimination		Lexicon		Structure		context
		segmental phonemes	supra-seg. phonemes	vocabulary	idioms	morpho-logical	syntactical	
(B)								
1	◎ 2		レ					レ
	5		レ	レ	レ			
	◎ 12			レ				レ
	◎ 13	レ		レ				
	16			レ	レ			
	17			レ				レ
2	◎ 5	レ			レ			
	12	レ		レ			レ	
	20	レ	レ	レ				
3	◎ 2				レ			レ
	5			レ				レ
(A)								
1	4			レ			レ	
	5			レ				レ
	8			レ				レ
	9			レ				レ
	13			レ				
	17			レ	レ			
2	2		レ	レ				レ
	3		レ		レ			
3	1							レ
	4			レ				レ

◎ 1・2年共通

かには表 6 のように分類される。

たいへん明瞭に発音されたテープであるため、Auditory Discrimination が原因で正答できなかったと思われるものはあまり多くはない。一番多い要因として考えられるのは Lexicon, 中でも Vocabulary の問題が影響

大学英語教育における聴解力養成の条件

していると思われるものがある。これらの単語の多くが高校基本語いのグループに入っているにもかかわらず正答率が低いのはやはり音としてはとらえにくいということが第一に考えられ、さらに語い不足も大きな要因であろう。個々の音がはっきりきこえ、かつ難易度の高い語を使用していない問題の誤答率が多い場合には Context を把握できないものと、ここでは想定される。

(3) 1年次から2年次への上昇率

これまで5回にわたっての1、2年目の聴解力を全受験者を対象として考察してきたが、この項では同一学生の伸長度という観点から1年目と2年目の差を検討する。従って対象となる学生は、先の受験者から、1年目あるいは2年目のみ受験した者を除外した次の人数である。

1981年→1982年 Form B 90名

1982年→1983年 Form B 99

1983年→1984年 Form B 73

1984年→1985年 Form A 98

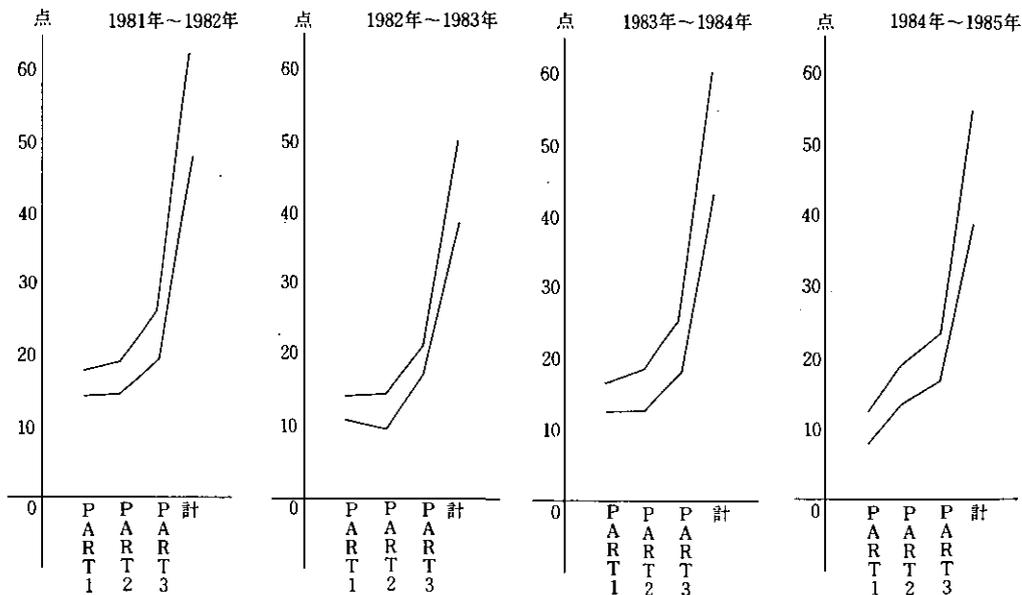
この受験者の成績は下の表のようになる。

表7 PART別得点分布及増加率

単位：点

	PART 1	PART 2	PART 3	TOTAL
1981	14.2	14.3	19.4	47.9
1982	18.0	19.1	26.2	63.3
対前年比(%) <sup>7)</sup>	126.8	133.6	135.1	132.2
1982	10.9	9.9	17.5	38.3
1983	14.2	14.4	21.3	49.9
対前年比(%)	130.3	145.5	121.7	130.3
1983	12.4	12.4	18.1	42.9
1984	16.4	18.3	25.0	59.7
対前年比(%)	132.3	147.6	138.1	139.2
1984	8.1	13.5	16.7	38.3
1985	12.4	18.9	23.2	54.5
対前年比(%)	153.1	140.0	138.9	142.3

図3 PART別得点グラフ



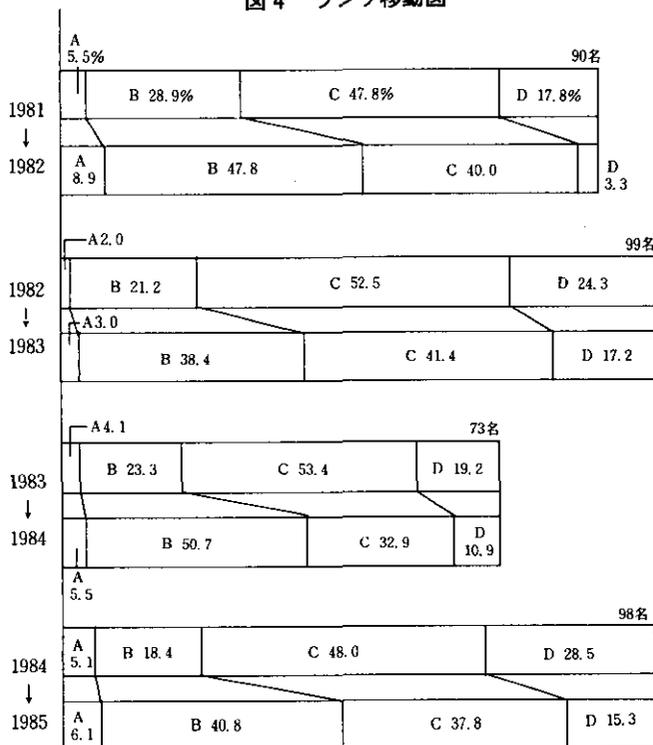
大学英語教育における聴解力養成の条件

表7をグラフにしたものが図3である。いずれも下が1年目、上が2年目の得点である。

前年総合得点を100とした場合約30~42%の伸び率は注目すべき数字である。PART別で特に伸び率の高いのは1984~85年のPART1である。入学直後の1年目では低い得点であったが、1カ年での伸長率の高さには驚くべきものがあり、大いに評価できよう。

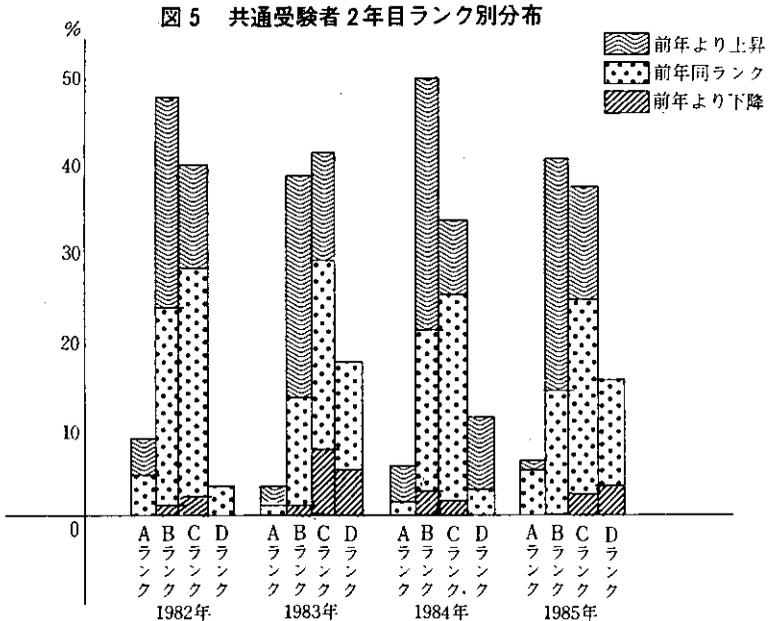
次にランク別移動状況を見ると、図4で明らかなように、Aランクはわずかながらの増加、Bランクは著しい増加を見せ、次いでCランクとDランクが減少するというパターンになっており、大まかには2年目の伸長率は、Bランクの上昇とCランク、Dランクの減少にあるといえる。

図4 ランク移動図



さらに2年目のランク構成を、前年度からの移動別にあらわしたのが図5である。

1983年を除いてはBランクがCランクを上回り、1983年でもBランクとCランクは接近している。いずれの年にもBランクとCランクが全体の大部分を占めている。中でも前述したようにBランクの増加がめざましくかつBランクの構成のうち半数以上が、主としてCランクからの上



昇組であることは注目し値する。JACETでは「我国における大学の英語教育の到達目標としてA段階すなわち100点以上をひとつの具体的目標として今後の学生の指導に役立てたい。」<sup>8)</sup>とあるが、全国の平均点が30点台のテストで100-120点取得をめざすのは、意義はあるものの容易ではない。目標に至る一步手前のねらいとしてBランクの増加は大いに好ましい結果であり、Bランクの構成人数が、聴解力のレベルを知る大きな目安となる。この意味からも、過去5カ年実施のうち、2年目Bランク

大学英語教育における聴解力養成の条件

構成の半数近くあるいはそれ以上の人数がCやDランクから上昇した学生であることは、1年目から2年目の聴解力習得の指導体制が有効に機能しているものと推察できる。さらに望むならばDランクのCランクへの移動をもっと期待したいところである。

これらの学生の入学時の聴解力とその後の伸長の度合を調査すべく、JACETヒアリングと入試ヒアリングの相関を次項にて検討する。

3. JACETヒアリングと入試ヒアリングの相関

入試ヒアリングとJACETヒアリング各年度の相関図、相関係数及び回帰直線は図6～図9に示されるとおりである。

図6 入試(1983) : JACET(1983・1年目)

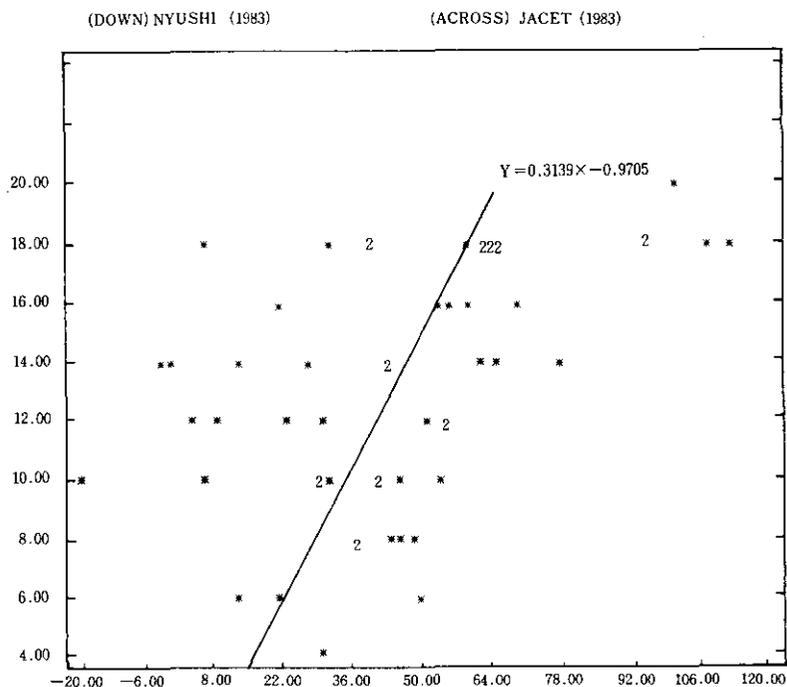
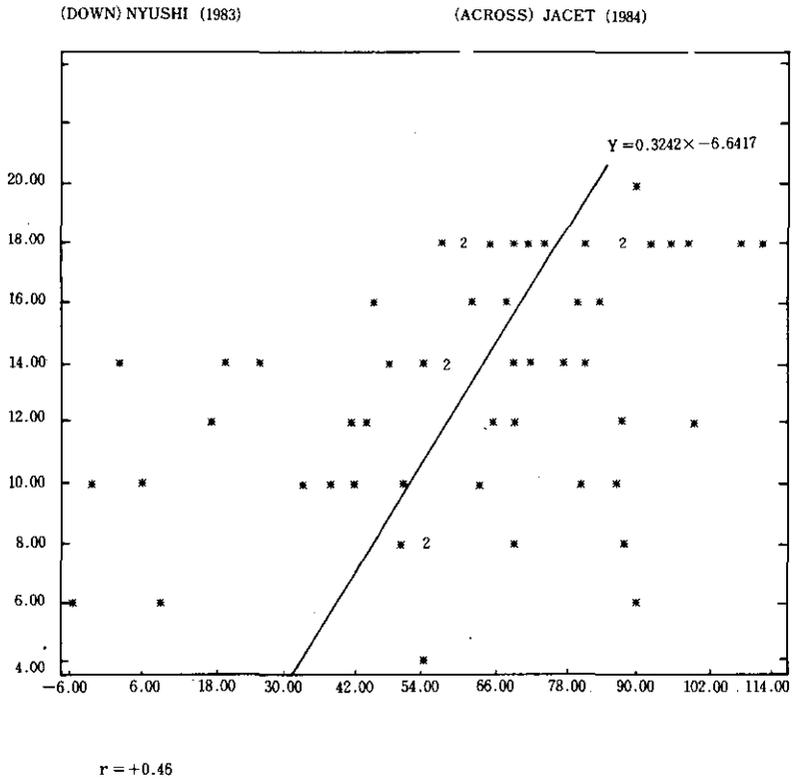


図 7 入試(1983) : JACET (1984. 2年目)



大学英語教育における聴解力養成の条件

図 8 入試(1984) : JACET (1984. 1年目)

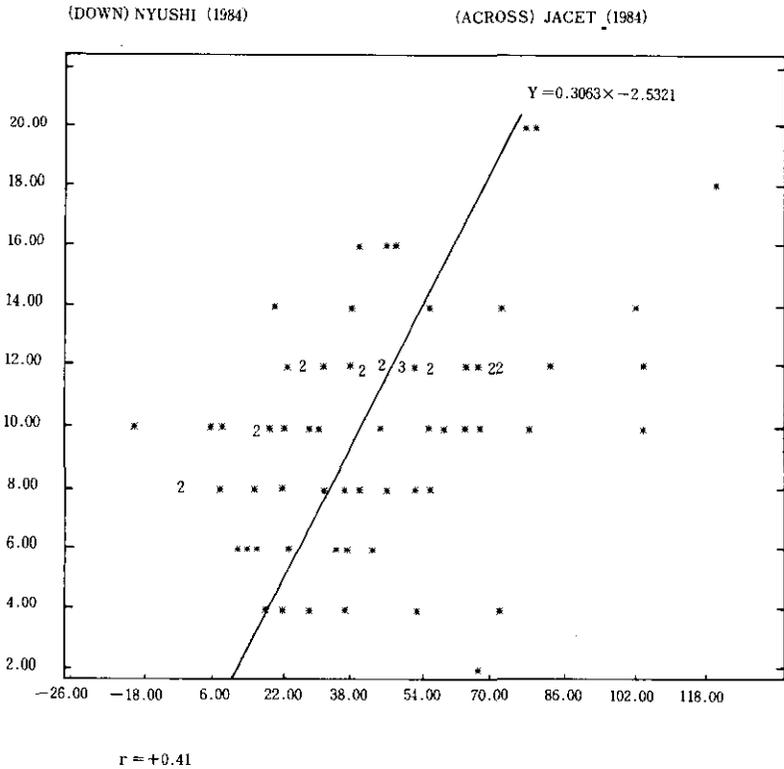
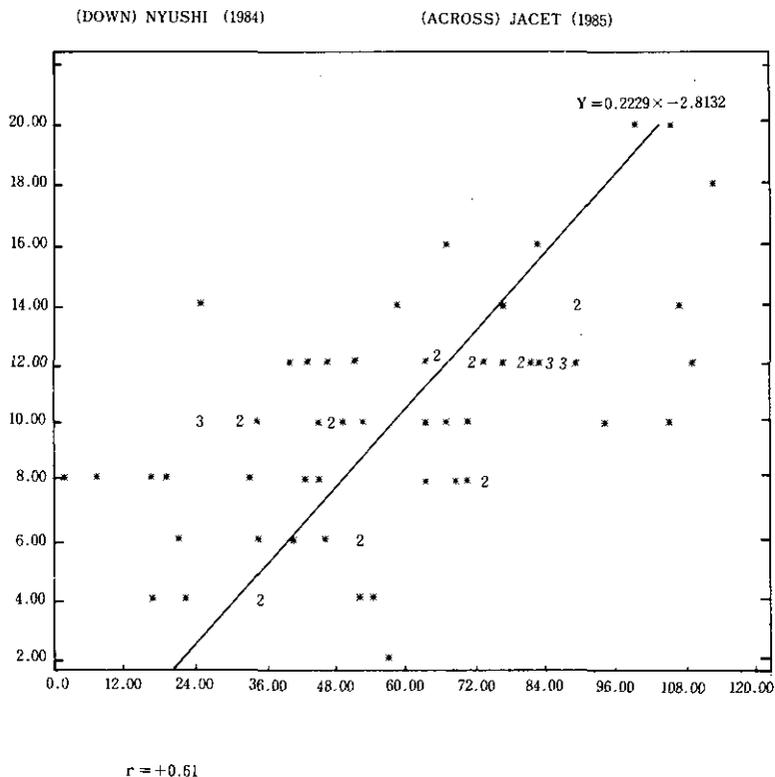


図 9 入試(1984) : JACET (1985. 2年目)



以上のデータより、相関係数は  $r = +0.41 \sim 0.61$  であり、一般的にはかなり相関があるといえる。

## V. 結語

まず第 1 に第 3 章 (pp. 173—5) ですでに指摘したように本学英文学科の聴解訓練はかなり成果を挙げていることが判明した。1 年次から 2 年

次への伸び率が前年度を100として約130～142%と上昇しており、全国私大英文科との対比でもその伸長度はきわめて顕著である。(p. 173の表7と注4を参照のこと)

第2に学生の聴解困難項目に関しては表6 (p. 172) のデータで明らかのように Lexicon と Context の領域で誤答率が高いことが判明した。このことは phonemic level の aural perception はかなり習得されているが、内容が高度になるにつれて語彙の不足と内容把握の力に欠けていることに原因があると考えられる。

第3に本学で実施している入試ヒアリングテストの結果と1, 2年次に実施している JACET 英語聴解力標準テストの結果に相関があるかどうかを調べたが、両者の間には図6—図9(pp.177—180)で明らかのようにかなりの相関があることが認められた。このことから本学英文学科で実施しているヒアリングテストの妥当性と必要性が十分認められると判断できる。

本稿では主として以上の三点が明らかにされたが、さらに本学英文学科学生の英語聴解力養成の条件を整えるためには、次のことが必要となるであろう。第1は Language Lab の徹底的活用により、学生の Authentic English への Exposure (接触時間) の増大を計ること、そして第2は通常教室で行われる英語ネイティブスピーカーによる指導展開との緊密な連携体制をつくり、より効果的な教材の体系化と指導法の開発が望まれよう。

#### 注

- 1) 『手引き書・Form B』 p.2
- 2) 以下、「JACETヒアリング」という。
- 3) 前述したように、下記の受験者数は、合格し入学した者の数字である。
- 4) 全国私大英文専攻者の得点平均及び受験者数は次のとおりである。

1981年	1年目	Form B	37.4点	1,152人
	2	B	47.5	853
1982	1	B	39.7	924
	2	B	49.5	749

1983	1	B 30.8	443
	2	B 38.9	306
1984	1	A 41.3	1,519
	2	B 37.2	419
1985	1	A 44.5	1,096
	2	A 41.3	362

- 5) A (120—100点) B (99—60点) C (59—20点) D (19点以下)  
目やすの主たるものはA…この程度なら十分理解できる。B…相当理解できる。C…多少理解できる。D…ほとんど理解できない。
- 6) この年は1, 2年次学生が異った Form を受けているため、合計するのは適当ではないが、参考までの数字である。
- 7) 対前年比の%は前年を100とした伸び率を意味する。
- 8) 『手引書・Form B』 p.18。

参考文献

- Asher, J. 1974. "Learning a Second Language Through Commands: The Second Field Test" MLJ LVIII.
- Belasco, S. 1965. "Nucleation and the Audio-Lingual Approach" MLJ XLIX, No. 8.
- Paulston, C. B. and Bruder, M. N. 1976. *Teaching English as a Second Language — Techniques and Procedures*. Newbury House.
- Postovsky, V. A. 1975. "On Paradoxes in Foreign Language Teaching," MLJ LIX, No. 1.
- 竹蓋幸生, 1984. 「ヒアリングの行動科学」, 研究社。

<付記>

本稿中の統計資料作成の準備に当っては本学で統計学を担当している経済学部澤田裕助教授よりご協力を頂いた。ご厚意に深く感謝申し上げます。

〈付 録〉

1983 (昭和58) 年度入学試験 英文学科英語「英語聞きとりテスト」録音原稿

**Hearing Test Part I**

Ex. Tom is five feet three inches tall. Bill is five feet five inches tall.

1. Mr. Leonard was twenty-three years old and not very rich. He was not married and he lived in two rooms in a small house in a big city.
2. It was Jimmy's birthday, and he was five years old. He got quite a lot of nice birthday presents from his family. One of them was a beautiful big drum.
3. Mr. Yates was nearly ninety, so it was often difficult for him to remember things, but he still liked traveling very much, so he and his wife went to Spain every year.
4. When Tom Howard was seventeen years old he was as tall as his father, so he began to borrow Mr. Howard's clothes when he wanted to go out with his friends in the evening.
5. Conrad Hilton, a young American whose grandparents came from Norway, had been fighting in France in the First World War. Early in 1919, he joyfully returned home to New Mexico.

**Hearing Test Part II**

Sally : Bill, can you help me carry this box? It is too heavy for me.

Bill : Sure, Sally. I'll be glad to. Where would you like me to take it?

Sally : I want to put it in my car. I need to take it to the post office this afternoon.

Bill : Oh, it's terribly heavy. What do you have in the box?

Sally : Well, the bookstore sent this box of books to me by mistake. So, I'll have to send them back.

Bill : Really? That seems like a big mistake.

Sally : I think so, too. But I have a letter here that explains everything. It seems that the computer printed the wrong address and I got the books.

- Bill : So now you have to return them. How much will you have to pay?
- Sally : Nothing. It wasn't my mistake. The bookstore will pay for everything. And they have promised that it won't happen again.

**Questions**

6. What does Sally want Bill to do?
7. How will Sally take the box to the post office?
8. Why did Sally receive the books?
9. How much will Sally have to pay to send the books back?
10. How did Sally find out about the mistake?

**英語聞きとりテスト (1983年度)**  
(問題用紙)

Part I これから放送する英文を聞きとり、その内容に一致するものを②、  
③、④の中から一つずつ選びなさい。

[例題]

- ① Tom is taller than Bill.
- ② Tom is as tall as Bill.
- ③ Bill is not so tall as Tom.
- ④ Bill is taller than Tom.

→ 1

- ① Mr. Leonard was a single man who lived in a small house.
- ② Mr. Lenoard was married and lived with his wife in two rooms.
- ③ Mr. Leonard was twenty-three years old and very rich.
- ④ Mr. Leonard was living in a big house in a big city.

→ 2

- ① Jimmy received many nice presents for his sixth birthday.
- ② Jimmy received many nice birthday presents from his friends.
- ③ Jimmy got a beautiful big drum as a Christmas present.
- ④ Jimmy got a beautiful big drum as his fifth birthday present.

→ 3

- ① Mr. Yates was too old to travel.
- ② Mr. Yates lived alone and liked traveling very much.
- ③ Mr. Yates was so old that he could not remember things very

大学英語教育における聴解力養成の条件

well.

④ Mr. Yates was young enough to remember the things in Spain.

→ 4

① Tom Howard was able to use his father's car when he was seventeen.

② Tom Howard was able to use his father's clothes when he was fifteen years old.

③ Tom Howard could wear his father's clothes when he was seventeen years old.

④ Tom Howard wanted to go out with his friends every evening.

→ 5

① Conrad Hilton came to New Mexico from Norway.

② The parents of Conrad Hilton came to New Mexico from Norway.

③ Conrad's parents fought in France in the First World War.

④ Conrad Hilton fought in France in the First World War.

Part II 次に放送する Sally と Bill による対話を聞きとり、五つの質問 (

→ 6

→ 6 ~ → 10) に対してそれぞれ正しい答を①, ②, ③, ④, の中から一つずつ選びなさい。

→ 6

① To help her with her homework.

② To explain the mistake.

③ To drive her car to the post office.

④ To carry some books.

→ 7

① By taxi.

② In her car.

③ On her bicycle.

④ In Bill's car.

→ 8

① She ordered them.

② The address was wrong.

③ Bill made a mistake.

④ She paid for them.

→ 9

① She won't have to pay anything.

② She will pay for the stamps.

③ She will pay for mistake.

④ She will pay whatever it costs.

→ 10

① The computer informed her.

② By telephone.

- © Bill told her.
- ④ She received a letter.

1984 (昭和59) 年度入学試験 英文学科英語「英語聞きとりテスト」録音原稿

### Hearing Test Part I

Ex. Tom is five feet three inches tall. Bill is five feet five inches tall.

1. Dick was seven years old, and his sister, Catherine, was five. One day their mother took them to their aunt's house to play while she went to the big city to buy some new clothes.
2. Rose left high school when she was eighteen years old and went to a typing school for a year. She passed her examinations quite well and then went to look for work. She was still living with her parents.
3. Bob Johhson has a day off from work today so he has decided to go for a drive with his wife. Bob's car is a small, compact model. He used to have a bigger car but he got rid of it because it consumed too much gas. His new car is much more economical.
4. Ralph McDonald was looking for his wallet. He wanted to buy a can of cola at the station kiosk. Unfortunately, however, he was not going to be able to find his wallet because it had been stolen by a pickpocket on the subway a few minutes before.
5. Mrs. Park owns three gift shops. Two are in the capital city of her country. The other is in another large city. Every year, for the last six years, she has made a trip overseas to buy merchandise for her stores.

### Hearing Test Part II

Jim : Where can I get a ticket for Hakodate, Yumiko ?

Yumiko : Try the third window to the right, Jim. It's for long distance trains.

Jim : I can't explain what I want ; will you help me ?

Yumiko : Sure. When do you want to leave ?

Jim : As soon as possible. I only have the weekend free.

Yumiko : There's an express at 12:50. How's that ?

Jim : OK. Is there a dining car on it ? I haven't had lunch yet.

大学英語教育における聴解力養成の条件

Yumiko : I'll ask when you get your ticket. If not, you can buy a lunch on the platform before you get on.

Jim : What time does it get in?

Yumiko : Let's see ... 5:37.

Jim : Great! My friends are expecting me for dinner.

**Questions :**

6. What is Jim asking Yumiko?
7. What does Jim ask Yumiko to help him with?
8. How long is Jim free for this trip?
9. Which meal hasn't Jim eaten yet?
10. Where does this conversation take place?

英語聞きとりテスト (1984年度)  
(問題用紙)

Part I これから放送する英文を聞きとり、その内容に一致するものを1, 2, 3, 4の中から一つずつ選びなさい。

(例題) 1 Tom is taller than Bill.

2 Tom is as tall as Bill.

3 Bill is not so tall as Tom.

4 Bill is taller than Tom.

① 1 Dick's elder sister was seven years old.

2 Dick's younger sister was five years old.

3 They went to the big city with their mother.

4 They went to their aunt's house alone.

② 1 Rose was trying to find a job.

2 Rose was working as a typist.

3 Rose was living alone.

4 Rose was still learning to type.

③ 1 Bob is using a big car, though it consumes too much gasoline.

2 Bob bought a new big car which was much more economical.

3 Bob was using a big car once, but he has exchanged it for a smaller one.

4 Bob has a big car and his wife a small one.

④ 1 Ralph wanted to buy a can of cola at the grocery.

- 2 Ralph wanted to buy a can of beer at the grocery near the station.
  - 3 Ralph wanted to buy a can of cola, but he gave up because he remembered it was not good for his health.
  - 4 Ralph wanted to buy a can of cola, but he could not buy it because his money had been stolen.
- ⑤
- 1 Mrs. Park is an active business woman.
  - 2 Mrs. Park is a clever school teacher.
  - 3 Mrs. Park has gone to foreign countries to study about computers.
  - 4 Mrs. Park has been running three gift shops in the capital city of her country.

Part II 次に放送する Jim と Yumiko による対話を聞きとり、五つの質問 ( ⑥ ~ ⑩ ) に対してそれぞれ正しい答を 1, 2, 3, 4 中から一つ選びなさい。

- ⑥
- 1 Where Hakodate is.
  - 2 Where to buy a ticket for Hakodate.
  - 3 How far it is to Hakodate.
  - 4 What kind of ticket is needed for Hakodate.
- ⑦
- 1 To help him explain what he wants.
  - 2 To help him carry his suitcase.
  - 3 To help him catch the train.
  - 4 To help him phone his friends.
- ⑧
- 1 Three days.
  - 2 A week.
  - 3 Five days.
  - 4 The weekend.
- ⑨
- 1 Breakfast.
  - 2 Lunch.
  - 3 Dinner.
  - 4 A snack.
- ⑩
- 1 On the street.
  - 2 In a bus terminal.
  - 3 In a railway station.
  - 4 In an airport.

北星学園大学文学部北星論集第23号正誤表

頁	誤	正
158	(本文10行目) compreh <u>e</u> n <u>s</u> ion	compreh <u>e</u> n <u>s</u> ion
183	(本文11行目) Mr, Yates	Mr. Yates
206	(本文 8 行目) (Figure 10).	(Figure 10).
207	(本文18行目) demartion	demarc <u>a</u> tion